

沈下橋の建設と 暮らしの変化

はじめに

国際インフラパートナーズ¹がミャンマー共和国の地方部に建設した沈下橋²が、地域の人々にどのように受け入れられ、活用されているのかを知るために、住民へのインタビューおよび現地での撮影を行い、フォトレポートを作成しました。取材は写真家の兵頭千夏さん³に依頼し、2017年から2019年にかけてマグウェ地域に建設した6本の沈下橋付近に於いて、2020年2月に行われました。

¹ 特定非営利活動法人国際インフラパートナーズ（英語名：Japan Infrastructure Partners / 略称：JIP）は、持続可能な社会の発展を目指し、海外技術協力の経験を持つ有志により2006年に設立されました。開発途上国の交通インフラを迅速に整備するため、国内外の政府関係者および地域住民と協力し、技術移転を目的とした、道路舗装・橋梁建設・国際交流などの事業を実施しています。 <https://jip.or.jp>

² 沈下橋（別名：潜り橋）は通常の橋よりも低い位置にかけられる小規模な橋で、安価で容易に作ることが出来ますが、洪水が起こると水面下に沈んで一時的に通行出来なくなります。日本でも1980年頃まで建設され、全国に多数現存します。国際インフラパートナーズは、ミャンマーの地方部の交通を迅速に整備するため、日本政府の資金援助により、ミャンマーの地域住民、地域政府と協力して、各地で沈下橋を建設しています。

³ 兵頭千夏さんはヤンゴンを拠点に、ミャンマーの人々の生活・伝統文化・信仰・女性をメインテーマに撮影している写真家です。2003年よりヤンゴン文化大学に2年間留学し、ミャンマー語の通訳者、翻訳者としても幅広く活躍しています。

目次

はじめに 1

| 2

目次 2

タキン橋 3

テインリン橋 8

テザ橋 12

トゥリヤ橋 17

GGP 橋 22

メッタ橋 27

建設省地方道路開発局（DRRD） 33

高等技術専門学校（GTI） 34

タキン橋

マグウェ地域 タイエツ地区

| 3

(橋長 178 m うち 36 m マグウェ地域政府が予算負担、幅員 4.3 m)

現地レポート

タイエツの町から南西に車で約 30 分、パプツ村にタキン橋は架かっている。2018 年度の事業で建設されたタキン橋は、25 村、約 63,000 人に裨益する。この辺では、落花生、豆、米、玉ねぎ、雨季にはゴマなどを栽培している。

この地域の雨季は 4-7 月くらいまで。これまで雨季の間は、ボートに乗って河川を渡っていた。バイク 1 台につき 1000k、人は 500k 支払っていた。水量が多いと渡れなかったので、待たされることも多かったそうだ。

一度にバイクは 4 台しか乗らないボートであったが、その当時はありがたく感じていたという。しかし今は沈下橋が完成し、安全かつ金銭的にも時間も有効に使えるようになったと喜びの声が聞かれた。では、ボート業をしていた人は失業したのかと村長の U Thein Myint (53) に尋ねると、それが本業ではないので問題ないよと笑われた。

雨季はボートだけでなく、牛車に乗って渡ってもいたそうだ。収穫物などを市場に出す場合、牛車に載せて河川を渡り、トラックのある場所に着くと、また積み替えなければならず、たいそう時間がかかった。

沈下橋のおかげで雨季でもすぐに出荷することができるようになり、農家にとって大変ありがたいと感謝の声が何度も聞かれた。例えば今だと、村の収穫物の落花生などをピーの町に 4 台、タイエツに 4 台、毎日 8 台が沈下橋を渡っている。ちなみに近隣 25 村には車が 20 台あるそうだ。

沈下橋が完成したことで、経済面だけでなく、保健面の不安も解消されたという。妊婦の容態が悪化し、町の病院に緊急搬送が必要となった時、それが雨季で水量が多く激しい場合は、筏に乗せてひっぱり、車まで筏を皆で担いでいたそうだ。蛇に噛まれる人もパプツ村だけでも毎年 2-3 人おり、他村もいれると 14-15 人になる。雨季の場合、河川を渡るのに時間がかかり死亡率が高かったが、今では 1 時間ほどで搬送できるようになり多くの命を救っている。

パプツ村を流れる河川は雨季の時だけでなく、一年を通して少量だが水が流れている。そのため毎年、雨安居が明ける 10 月頃に村人たちで村の竹や木材を伐採し、鉄を使ってバイクが通れる橋を造ってきた。雨季が始まると流れてしまう橋だが、早く雨季が始まり雨量が多い年は、2 度橋造り

をすることもあったという。沈下橋が建設されたことで、もう村人総出で橋を造る必要がなくなった。労力と金銭的負担がなくなったと感謝の言葉が聞かれた。

約4ヶ月にわたる沈下橋の建設時には、パプツ村の村人が中心になって活動していた。例えば、どこで良い資材が入手できるかなどアドバイスもしたそう。毎日、80-100人が作業していたが、村人10人も作業員として、1日8000チャット¹で雇われていたそう。コンクリートを敷き詰める時などは手早く作業をしなければならず、人手がさらに必要になるので、大勢の村人が働いたそう。その場合でも1日7500チャットもらえたので臨時収入が得られてありがたかったとの声が聞こえた。自分自身が作業し、近くで見えていたので、この沈下橋は堅固だと断言できると胸を張っていた。実際、沈下橋に大きな破損や問題は起きていない。

裨益する25村には18の学校があるがパプツ村には高校がない。村から便利な場所にある高校はタイエツの町中なので生徒たちは寮暮らし生活になる。週末になると沈下橋を渡って村に戻るのだが親は子どものことが気がかりでよく食事を届けるのだそう。雨季でも、沈下橋のおかげですぐにバイクで届けることが出来るようになって嬉しいという声が聞かれた。

中学分校の校長 U Htoo Aung Chit (34) の話しでは、4割の教師が沈下橋を

利用して学校に通っているそう。大雨が降って、帰宅できなくなった教師たちもいたという。もうそのような心配もなく、大変ありがたいと感謝された。

同行してくれた DRRD²の U Ko Ko Min が沈下橋建設までの経緯を話してくれた。この辺は水の流れが毎年変わるので、河道について建設の1年前から調べていたという。そして、政府の予算でボックスカルバートを2箇所建設した。それでも河道は変化し、沈下橋を長く建設することになったという説明を受けた。雨季になると堤防の侵食が激しく、政府の予算で沈下橋近くに石を積み、護岸工事をしていた。政府は来年度、4月以降にさらなる護岸工事をおこなう予定。U Ko Ko Min は「沈下橋の建設は難しくない。河道を把握するのが難しい」と何度も言っていた。

沈下橋には手すりがないため、子どもたちが落下しないか心配なところ。U Htoo Aung Chit 校長に、学校ではどのような指導をしているのか尋ねてみた。校長は、車に向かって歩くようにと指導しているとのこと。これまで橋から落下した児童生徒たちはいないそうだが、今後ルールを決め、朝礼などで常に話をするようにしたいと話していた。

家庭ではどのような話しをしているのか2人の息子の母親 Daw Win Yee (37) に聞いた。水汲みが大変なので、子どもたちと一緒に河川で水浴びをしているのだそう。

¹ チャット(k)はミャンマーの通貨単位。1000チャット≒80円。

² ミャンマー建設省地方道路開発局 (Department of Rural Road Development) の略称。

「毎日、自転車に乗って橋を渡っています。橋のおかげで早く行けるようになりました。息子らは橋の地覆に座って話しをしたりしていますね。車に気をつけて、橋から落ちないように、ふざけないでと言いつけています」と言っていた。

パプツ村の U Thein Myint 村長に、沈下橋の維持について確認した。牛車の車輪外縁には鉄が巻かれているため橋面を痛めな

いよう、雨季以外は沈下橋を利用させていないそうだ。³牛車道を渡らせている。水位が上がった時に流れ着いたゴミや流木などは村人たちが団結して速やかに除去しているとのことだった。

沈下橋完成後の雨季は、橋面よりも水位が上がってもすぐに引いたので、橋を利用できなかった日はなかったそうだ。生活が楽になったと何度も感謝の言葉が聞かれた。

³沈下橋の橋面はコンクリートのため、牛車の車輪に巻かれた鉄で痛めることはく、誤解している住民が多い。

フォトレポート



タイエツの町からパプツ村に向かう



車が来ると端に寄る子どもたち



タキン橋の全景



橋の下をボートはくぐれるが
牛車は行交えない高さ



パプツ村からタイエツの町を望む



護岸工事の説明をする
DRRD の U Ko Ko Min



収穫物の出荷も沈下橋のおかげで
楽になった



水量が増えた時に使用する通行止めゲート



車の往来が増えた



多くの村人が集まり意見を聞かせてくれた



パプッ村の村長 U Thein Myint と銘版



ボックスカルバート

テインリン橋

マグウェ地域 タイエツ地区（橋長 66 m、幅員 4 m）

| 8

現地レポート

2017 年度の事業で建設されたテインリン橋は、タイエツの町から西に車で 1 時間 15 分ほどのアテッレー村とチンゴン村の境に位置する。沈下橋が建設されたことで、11 村、1 万人弱が裨益する。この辺では米、ゴマや豆を主に栽培している。アウンランの町側のアテッレー村にはゴマや落花生から油を抽出する機械があるので、橋を渡ってチンゴン村の人が多くやって来る。

アテッレー村の村長で橋建設委員会の会長 U Thein Lwin (57) をはじめ橋建設委員会メンバーや村人が集まってくれた。沈下橋が完成してからどのように変わったか話しを聞かせてもらった。

雨季はだいたい 6-9 月まで。雨季になると河川の流れが激しく、ボートは流されてしまうので利用できなかった。バイクも危ないので運転せず、水牛に乗るか、膝くらいまで泥と格闘しながら歩いて渡っていた。水の流れが早く、特に女性は雨季に河川を渡るのを恐れていたそう。

アテッレー村には高校があり、在校生 270 人、教師 15 人が教鞭をとっている。橋向こうのチンゴン村はじめ 6 村には中学校分校までしかないの、アテッレー村の高校に 40-50 人の生徒が通っている。高校

に通う他村の生徒が流れに巻き込まれないよう、村人は一緒に河川を渡るなどして、常にサポートしていたそう。河川の水量が増すと危険なため何日も渡れず、学校を休まざるを得ない日も多かった。すぐに水位が下がらない日もあり、2-3 日連続して渡れない日が年に数回あったという。

雨季の水量は多いが、この地域は水が乏しく、飲料水は井戸や溜池の水を利用しなければならない。何度も井戸まで水を汲みに行く人が橋を往来していた。河川に堰を造った場所で水浴びをし、洗濯している姿も見られた。

「沈下橋が完成してからは往来が非常に楽になったよ。バイクに乗って大量の水汲みもできるようになり、負担が軽減されるようになりました」と U Thein Lwin 村長に笑みがこぼれた。

高校の校長 U Win Myint と教師の Daw Nyo Nyo Aye から話話を聞いた。先生たちはこれまで河川の水量を常に心配していた。水かさが増したら学校に来ないように指導してきた。命の危険があるからだ。河川を渡れず学校を休む生徒たちのため、補習授業をおこなっていたが、橋が完成してからはそのようなこともなくなった。雨季に学校へ通おうとすると、ずぶ濡れになるた

め着替えを持たせなくてはならない。水流にのまれる危険もある。そんな苦労までさせて学校に通わせたくないという親もいたそう。校長いわく、それが今は解消されたので、高校進学率も伸びると思う、雨季の通学問題が解決し、安堵しているという。

また学校で安全指導などおこなっているか質問すると、沈下橋の上で遊んだりせず端を歩くよう、雨季の水量が多い場合は橋の中央を歩くよう朝礼などで話しているということだった。

リサイクル業を営む村人の U Tin Aung (57) には3年生になる息子がいる。子どもには橋を渡る時は中央を歩き、車が来たら端によること、その時、落ちないように気をつけなさいと言い聞かせているそう。U Thein Lwin 村長もこれまで事故は起きていないと言っていた。

教育面だけでなく健康面においても喜ばれていた。アテッレー村近隣の21村を政府のヘルスアシスタント(HA)が管轄し、子どもたちに予防接種をしているのだが、雨季でも沈下橋のおかげでHAがバイクで移動できるようになったそう。

テインリン橋が完成するまでの約4ヶ月間、村長であり橋建設委員会の U Thein Lwin 会長は工事の様子を毎日のように見にいられたそう。基礎工事は、しっかり作業されていて堅固な造りだと感じたそう。いくら強固な橋とはいえ長期的な維

持を考え、雨季は牛車も橋を利用して良いが、それ以外は牛車道を渡らせるようにしているそう。牛車の車輪外縁の鉄が橋面を痛めるからだ。しかし、1台の牛車が橋を渡って行ったのを見たので聞いてみると、きちんと村人に説明し、この時期の牛車の往来を禁止しているが、守らない人もいるとばつが悪そうな表情を見せた。そこで「牛車往来禁止」の看板を作ることを検討しているそう。また、橋に続く道の高低差があるため、低くするべきかもしれないとも話し合っているそう。

沈下橋完成後、雨季の水位は、橋面よりも上がったことがないので、毎日、安全に橋を渡ることができたという。水位が上がった時に流れ着いた流木などは、なるべく早く村の有志たちで清掃しているそう。橋維持委員会というのはないが、必要を感じているとのことだった。

沈下橋ができたことで、士気も高まり、さらに村の環境を整え、消防署の配備、溜池の修理もおこないたいと考えていると U Thein Lwin 村長は語った。また、この一帯の若い男女320人くらいがタイやマレーシアに出稼ぎをしている現状らしく、それをなんとかしたいと打ち明けてくれた。

最後に、沈下橋が出来たことで悪かった点と良かった点を U Thein Lwin 村長に尋ねた。「悪いことなどひとつありませんよ。良いことばかりです。村の発展に繋がる利益を受けたと感じています。支援してくれた日本のみなさんに感謝しています。いつもみなさんの健康を祈っています」

フォトレポート



タイエツの町側アテッレー村から見た
テインリン橋



橋桁周囲にコンクリートが流されていた



橋の横の牛車道



水汲みで多くの人々が橋を利用していた



牛車道を行く牛車



歩行者の往来も多い



下校する児童たち



橋建設委員会メンバーと子どもたち



アテッレー村の高校 U Win Myint 校長
(左) と教師の Daw Nyo Nyo Aye (右)



アテッレー村・村長で橋建設委員会・会長
の U Thein Lwin と銘版



毎日、農作業のため橋を渡る Daw Ohwn
Kyin 「とても楽しらせてもらってます」



通行止めゲート

テザ橋

マグウェ地域 タイエツ地区（橋長 95 m、幅員 4 m）

| 12

現地レポート

2017 年度の事業で建設されたテザ橋はタイエツの町から北北西に車で約 30 分、アウンランの町側のニャウンジツ村とチーダイ村の境に架かっている。この沈下橋は、9 村、約 4500 人に裨益する。この辺では、米、豆、ゴマ、玉ねぎなどを主に栽培している。

ニャウンジツ村にある中学課程まで教える僧院学校に、大勢の村人が集まり到着を待ってくれていた。活発に意見を述べる姿から沈下橋に対する深い思いを感じた。

僧院学校はテザ橋近くの高台にあり、橋の全景が見渡せた。早く授業を終えた生徒たちが帰宅する様子がうかがえた。

沈下橋がまだ完成していない時の雨季は、河川の水が激しく、ボートなどは流されてしまうため使用できず牛車に頼っていたそうだ。もちろん車も渡れない。そこで牛車に荷物を載せ 1 袋 500 チャット¹ 支払い、河川を渡っていた。人が渡る時には親しい人たちと時には手を繋ぎ、一緒に渡っていた。流れが激しく、1 人で渡るのが怖いからだ。雨季はいつも着替え用の服を持っていかなければならなかった。そし

て、みながいつも雨量のことを心配していたという。なぜなら雨が降って水位が増すと河川を渡れず、休校になるからだ。そのように学校が休みになる日も多かったそうだ。それが今では沈下橋のおかげで、休校になることはなくなった。橋を利用する教師にとっても授業の前に疲れ果てることはもうない。近隣の村に高校がないため、進学する場合、タイエツの町で寮生活をしながら学ぶことになる。親元を離れて暮らす子どものもとへすぐ駆けつけられるようになったことありがたいという声が聞かれた。

沈下橋が完成したことで、保健面の不安が払拭されたという。急患が出るとタイエツの町の病院に搬送するのだが、雨季で水位がある時は牛車でも渡れなくなってしまふ。そういう時は筏を担ぎ、患者を乗せて川を渡っていたそうだ。それが今では直ちに搬送できるようになり危険にさらされることがなくなった。

また、近隣の村々を政府の保健センター職員約 10 人が交代しながら子どもたちに予防接種を打ってくれているのだが、今は雨季でもバイクに乗って問題なく往診に来

¹ チャット(k)はミャンマーの通貨単位。1000 チャット≒80 円。

てくれるようになった。雨季の時は立ち往生することもしばしばだった。

経済活動も活発になった。牛車に荷物を載せ替える必要なく、人と荷物を積んだ大きなトラックが毎日12台ほど橋を利用しているそうだ。トラジーと呼ばれる三輪車10台が日に5回往復し、タイエツでの商売や買い物客のための足となり活躍している。

村人の Daw San Naing Win (38) は、毎日2回は沈下橋を往復しているという。栽培している豆の畑が橋の向こう側にあるからだ。そして、橋の下を流れる川で毎日、洗濯と水浴びをしている。「橋が出来てからは一年を通じ生活がとても便利になりました」満面の笑みを見せていた。

ちなみに昨年の雨季の間、橋が渡れなかったのは1日だけ。次の日には水位も下がり、三輪車も往来できるようになっていたそうだ。

橋の建設は約4ヶ月だった。現場で働く1日6000チャットが支払われていたそうで、ニャウンジツ村の男性も数名汗を流していたそうだ。働いていた男性は、基礎工事は固いところまで深く掘っていて、しっかりとレベルの高い工事だと感心していたそうだ。高齢で働くことは出来ないが、橋ができるのが楽しみで、毎日建設現場を見に行っていたおじいさんも「見たこと

ない頑丈な造りだよ」と嬉しそうに語っていた。

村人たちは、これまで河川を渡るのは大変だったがこんなにも村が便利になったと Facebook で投稿したり、親戚に話したりしていると自慢げであった。もう河川の水量が増しても怖くない、子どもたちが安全に学校に通えるようになった、本当にありがたいばかりだなど、口々に話す村人から、感謝と喜びの言葉が聞かれた。

橋が長く使えるよう、牛車は雨季のみ渡ることを許可し、それ以外は橋のそばにある牛車道を渡らせている。牛車の鉄の車輪で橋面を痛めさせないため²とのことであった。この辺は牛車が現役で活躍しているので、収穫物を積んだ牛車が渡れるよう橋桁を高くして欲しいと村が依頼したそう。そこで心配になるのは、子どもたちが橋から落下したら大惨事になるということだ。村人や僧院学校の U Kyi Maung (41) 校長たちは、これまで落ちた人はいないと答えた。学校や家でどのように交通安全教育をしているのか尋ねてみた。村人たちは、橋の端は歩かず、真ん中を歩くようにと子どもたちに言っているという意見が多かった。U Kyi Maung 校長は、雨季の時、自転車や車が来たら端によって立ち止まること、橋の上では遊ばないようにと朝礼などで時々話していると付け加えた。しかし、元気に橋の上を走る少年たちを見かけたので、問題が起きないように注意喚起が必要と

² 沈下橋の橋面はコンクリートのため、牛車の車輪に巻かれた鉄で損傷することはない。誤解している住民が多い。

感じた。テザ橋は高さのある橋なのでなおさらだ。

沈下橋が建設されたことで悪くなったこと、困っていることはないか質問してみた。ニャウンジツ村の U Tin Thein

(52) 村長は「困ったことはないですよ。嬉しいことばかりです。ただひとつ気がかりなことがあります。橋と道路の取付け部分の境目が当初より、6センチ（2インチ）ほど低くなってしまっていることです」と話してくれた。【写真参照】

DRRD³の U Ko Ko Min が、エンジニアの視点で問題ないことを説明してくれたので安堵したようだ。

それよりも河川には堤防がなく、激しい水流により浸食していることを DRRD の U Ko Ko Min が教えてくれた。村人たちは浸食されぬよう、また河道が変化しないよう制御する柱を自助努力で建てていた。今年の10月以降には国家予算で、河道を一

定に保つための整備をすることになっているそうだ。

また雨季に水量が増し、水が引けると流木やゴミなどが橋の周りに堆積されるが、その片付けは近隣の有志の村人が駆けつけ、速やかに片付けるようにしている。それもこれも河道を変えてしまいかねないからとのことだった。しかしながら、橋維持委員会を作るなど、体系的な活動を取組んではいなかった。

「今、さらなる願いは、まだ土を固めた道路なので舗装道路になれば、ということです」やる気に溢れ、村の発展を考える U Tin Thein 村長から、こんな言葉が最後に聞かれた。

村人と授業が終わった僧院学校の児童生徒たちとで記念撮影をした。そして、列を組んでおしゃべりしながら静かに児童生徒たちが下校していく様子を村人たちは見守っていた。

³ ミャンマー建設省地方道路開発局（Department of Rural Road Development）の略称。

フォトレポート



タイエツの町側、ニャウンジツ村から見た
テザ橋



下校風景



橋の全景



足が不自由にも関わらず、橋の完成を楽し
みに建設現場へ日参していた村の長老



下校風景



静かに渡るよう言い聞かせても走る子ども
たち安全指導は何度もおこなう必要が
あるだろう



ニャウンジツ村の人たちと僧院学校の児童
生徒による記念撮影



橋と取付け道路にできた約6センチの差



橋の下を牛車が行き交う



ニャウンジツ村の U Tin Thein 村長 (右)
オウッシコウツ村の U Aye Win 村長
(左) 銘版の前にて



村の自助努力で建てた
河道を変えないための柱



通行止めゲート

トゥリヤ橋

マグウェ地域 アウンラン地区 (橋長 66 m、幅員 4 m)

| 17

現地レポート

2017 年度の事業で建てられたトゥリヤ橋は、アウンランの町から東に車で約 1 時間、シンチャン村とユワマトン村の境に架かっている。アウンラン町側にはシンチャン村をはじめ 20 村あり、橋を渡るとそこはユワマトン村で他に 6 村がトゥリヤ橋を利用し、約 9500 人に裨益する。この辺ではゴマ、豆、玉ねぎ、トウモロコシなどを栽培している。

ユワマトン村の僧院で、橋建設委員会の会長を務めユワマトン村の村長である U Zaw Min Htun をはじめ橋建設委員会メンバーや村人から話しを聞かせてもらった。

これまで、雨季になると水の流れが激しいためボートを出して渡ることができないほどであった。水量の少ない時は牛車で渡っていたそうだ。気をつけていてもこれまで牛車や人が流され、命を失うことがあったと悲しい歴史を語ってくれた。また、へビに噛まれた人が命を落とすこともたびたびあった。河川の水量が増して渡れず、アウンランの町の病院に搬送したかったが叶わなかったからだ。昨年もへビに噛まれた人が 4 人もいたが、沈下橋のおかげで町の病院まで時間をかけることなく搬送し、事なきを得たそうだ。また緊急を要する妊婦

を町の病院に搬送する場合も同じような状況であった。沈下橋完成後の 2 年間、水位が増しても数時間で地覆が見えるようになり、毎日、橋を利用できたそうだ。そんなことから、保健面での不安がなくなったという。

経済活動においても変化がもたらされた。雨季で水位が上がって河川を渡れず、収穫したトウモロコシを売りに行けない日もあった。それが今では 24 時間いつでも河川を渡ることができ、ありがたい、価格の良い時に売ることが可能になったと感謝された。水位がそれほど高くない時は、牛車に荷物を載せて河川を渡り、車のある場所まできたらまた荷物を移し替えていた。それが今では手間が省け、時間も節約されるようになった。

トゥリヤ橋はバイクと車両の往来が多い。朝、車 15-20 台が荷物を積んで橋を渡る。人々を乗せる乗り合いトラックも多く、朝の 5 時からアウンランの市場に向かう。沈下橋が完成したことで、2019 年 12 月に村間を繋ぐ土の道が整備され、往来が活発になっているのだそうだ。さらに今後、車道の整備もされることが決まった。沈下橋建設によって波及効果を生み、村の発展に寄与する大きなインパクトを与えた

といえよう。しかしながら、沈下橋ができ道が良くなったことで交通量が増え、バイク事故の心配をするようになってきているという声も聞かれた。

沈下橋の建設は約5ヶ月だった。ユワマトン村の住民40人が1日5000チャット¹で作業に参加していたそうだ。従事していた男性に聞くと、太い鉄筋を使用し、ゴミが混じらないように気をつけ、きちんとした仕事ぶりだったと答えた。強い橋が完成したと感じたそうだ。ちなみに残業をすると食事もついて9000チャットもらえたらしい。

橋建設委員会から橋維持委員会に移行したが、まだこれといった維持活動を体系立てておこなっていなかった。今は丈夫に見えても、牛車の車輪の鉄により、橋面が削れていくのは確実だ。なぜなら玉ねぎ畑が広がっているため牛車道を造ることができず、牛車も沈下橋を利用しているからだ。牛車道を通るのは玉ねぎ栽培の終わる雨季の5-9月だけとなる。今後のことは話し合うつもりだと述べていた。

大雨が降ると濁流により、橋に流木などが堆積する。それらは橋に近い5村から男性たちが集まり清掃活動をおこなっているそうだ。ロープで引っ張り上げて、薪が欲しい人は持ち帰る。しかし、多くはまた河川に流すのだそうだ。橋に引っかかった流木などそのままにしていると、河道が変わる恐れがあるため、なるべく早く水が流れ

るよう心がけている。河川に堤防がないので浸食するのも心配だという。

そういえば、橋桁に流木がへばりついていたので聞いてみると、引っ付いてしまって人力では剥がれないのだそうだ。また橋と道路の境あたりに草が生い茂り、一部橋面まで覆っていたので、草むしりの必要を感じた。

橋に対する安全指導はどうなっているのか尋ねると、橋建設委員会の女性メンバーでもあったDaw Nyo (60)が説明してくれた。彼女には幼稚園に通う孫がいるが常に大人と一緒に外出しているそうだ。もともと村の子どもが1人で外出して橋を渡ることはほとんどないらしい。7-8年生、13-14歳くらいにならないと外出しない。出かける場合は友人と2人以上だそうだ。分別もついていて落下した人はいないとのこと。他の村人からは、バイクを乗るようになった子どもにはゆっくり運転するよう言い聞かせているという声も聞かれた。

シンチャン村の小学校(ポストプライマリースクール) Daw Khin Mar Cho 校長に話をうかがった。校長は橋を利用し学校に通っている。沈下橋が出来る前、通常はバイクだが、雨季の間は歩いて通っていたそうだ。雨の日は誰かが来るのを待ち、2-3人で手を繋いで河川を渡っていたという。1人で渡るのが怖いほどの水流なのだ。首まで浸かって頭だけ出し、鞆を頭上に持ち上げ、河川を歩ききったこともある。また牛車の上に乗って渡ったこともあ

¹ チャット(k)はミャンマーの通貨単位。1000チャット≒80円。

るという。雨季は普段着で学校へ行き、学校に着いてから持参した制服に着替えるのが習慣だったそう。劣悪な環境に驚きを隠せない。水位が高い時は学校を休むしかなく、年間、20日ほど学校に行けないと電話をかけたものだと言った。逆に自宅に戻れず、学校近くで2日間泊まることもあったそうだ。沈下橋が完成してからは休むことなく、毎日バイクで通っていると笑った。

校長は小学2年生の姪と一緒に学校に通っているのだが、姪が沈下橋から一度落ちてしまったというのではないか。幸いにも大事にはいらなかったが、その時に危険を認識したそうだ。その後、沈下橋を渡る時は慌てずゆっくりと中央を歩くよう指導しているそうだ。端を歩いていて、めまいなどで落下する可能性もあると思うから。今後はもっと児童たちに安全に関する話をしたいと言っていた。

集会をさせていただいた僧院のU Thumani 僧正にご挨拶し、沈下橋ができたことでどのような変化があったか質問してみた。僧正は「河川を渡っていた人みんなが助かり、苦しみがなくなりましたよ。素晴らしい功德をおこなってくれました」と感謝の言葉を述べられた。実は、以前から橋の必要性を村人たちと話しあってきたそ

うだ。しかし、金銭的な問題で実現できずにいた。そこで、橋が架かるという知らせを聞いた時、考えてもみなかったのとでも嬉しかったそうだ。僧正も弔事に関わる席に呼ばれると、雨季であっても川の向こうに行かなければならない。筏で渡ったこともあれば、頭だけ出し、鞆を頭上に載せて、河川を渡ったこともあるという。しかし、問題は解決したのだと微笑み、建設してくれた人たち、支援してくれた人たちに感謝しているとおっしゃった。

これからは子どもたちが橋から落ちないように気をつけなければいけない。子どもたちは保護者と一緒に渡り、大人も1人で橋を渡らないようにすれば危険な目に遭わないと思う。バイクも増えてきたので事故にも気をつける必要があるなど、今後の問題点を指摘した。

橋向こうの村が非協力的だと小耳に挟んだので、率直に僧正に聞いてみた。僧正いわく、喧嘩になった訳ではないので安心するように、説法会の時などで、具体的なことは言わず、「利他的である方が幸せだ」と説いているとおっしゃった。

村人たちの生活に信仰は切っても切れない重要な存在だ。良き理解者の僧正がいる限り、大きな問題にはならないだろうと安堵した。

フォトレポート



アウンランの町側から見たトゥリヤ橋



地覆の外側に設置されたロープ



牛車道がないため、橋を渡る牛車



橋面まで草が覆われていた



幼い子どもの手を引いて
親子が渡って行った



橋桁に残ったままの流木



銘版



シンチャン村の小学校（ポストプライマリースクール）Daw Khin Mar Cho 校長



沈下橋完成後、整備された土の道



U Thumani 僧正



毎日、橋を利用する玉ねぎ農家



僧院に集まってくれた
ユワマトン村の人たち

GGP 橋

マグウェ地域 アウンラン地区 (橋長 76 m、幅員 4 m)

| 22

現地レポート

在ミャンマー日本国大使館の草の根事業 (GGP)¹により建てられた沈下橋は、アウンランの町から東に車で約 45 分の場所に位置する。アウンラン町側のタンジェイ村とミョウラ村の境に GGP の橋 (以後 GGP 橋) は架かっており、約 20000 人に裨益する。この辺では豆や米を主に栽培している。

資金的な問題により JIP で建設することができなかったが、助言によって日本大使館の 2018 年度・草の根事業として採用された。

GGP 橋が建設される経緯を説明したい。2018 年、はじめにアウンランへのインフラを改善したいミョウラ村の人たちが中心となり 19 村に働きかけ、村間の道路整備に取り組んだ。賛同した 19 村の住民も道にするために必要な畑の土地を提供した。自助努力により、土で固めた道路約 1.2 キロを建設している時にマグウェ政府がそのことを知り、政府が大部分の予算を出してくれたそう。そのように、村の発展に尽力する人たちが多く、1 年半で道の

整備から GGP 橋の完成まで成し遂げた。利便性が向上し、この辺り一帯の経済活動が飛躍的に活発になっていった。

これまで雨季の間は、今の場所ではなく 600 メートルほど離れた場所から河川を渡っていたそう。牛車またはエンジンなしの小舟で渡っていた。小舟につけているロープを向こう岸の人が引っばっていたそう。舟に乗る場合、人は 500 チャット²、バイクは 1000 チャット支払わなければいけなかった。人力で渡っていたので 1-2 時間待つこともざらだったそう。アウンランの町で買物したいだけなのに、朝 4 時に牛車を借りて河川を渡り、市場に行っていた人もいた。水位が増せば数日間渡れなくなるため、へびに噛まれたり、急患が出た場合、アウンランの病院に搬送したくても河川を渡れず、途中で亡くなる人もいたそう。河川に続く道も雨季は泥だらけになり、アウンランの町へ行くのは一苦勞だったという。

¹ 日本国政府が開発途上国に対して行っている資金援助。草の根・人間の安全無償資金協力 (Grant Assistance for Grassroots Human Security Projects) の略称。

² チャット (k) はミャンマーの通貨単位。1000 チャット ≒ 80 円。

GGP 橋が建設されることになり、道路整備の時に活動したメンバーが再び橋建設委員会のメンバーとなった。

工事は4ヶ月半。橋建設委員会のメンバーは、毎日、建築現場を見に行き、欠かさずレポートを大使館に送った。建築作業には大変満足しており、このような堅固な橋ができたのも JIP の助言があつてのこと、とても感謝していると橋建設委員会の U Ye Myint (67) 会長は何度も口にした。予算がかからないそうなので、他の村にも同じように橋ができれば良いと思う。政府にはもっと建設して欲しいとも述べていた。

ちなみに現場で働くと8時間、5000 チャットが支払われたそうだ。

道路が整備されたところに GGP 橋が完成し、アウンランまでのアクセスが大幅に改善された。ミョウラ村よりもさらに奥のシュエバンドーアシェという村からバスが朝5-9時の間に7台、アウンランに向けて橋を渡る。それら7台のバスは昼の12時から4時半の間にアウンランから戻って来る。バス以外にも乗り合いトラックがシュエバンドーアシェとアウンラン間を往来していて、1日に約80台が橋の恩恵を受けている。さらにシュエバンドーアシェからは1日1便だがヤンゴン行きのバスも出ている。これまでヤンゴンに行く場合、アウンランでバスを乗り継ぎ1泊しなければならず、2日かかっていた。今では夕方に出発し翌朝ヤンゴンに着くようになった。

沈下橋完成後の昨年の雨季は、7日ほど雨量が多く水位が上がったが約3時間で水は引き、車、牛車、バイクで渡れるようになった。命の危険を考え、赤と白の地覆が見えない時は通行禁止にしているそうだ。子どもたちには保護者と一緒に橋を渡るよう、バイクに乗る人は、地覆は見えるが橋面に水が達している場合中央を運転するよう伝えているとのこと。橋を利用する教師が約100人、ミョウラ村の高校にバイク通学をする生徒が約120人いるが、今のところ沈下橋での事故や落下したという話しは聞かれていないそうだ。

タンジェイ村の中学で教える教師の Daw That Mon Aung と Daw Phy Phy Thin は毎日、GGP 橋を利用しバイクで通っている。橋のおかげで一年を通じて問題なく学校に行けるようになり、感謝していると述べた。

橋維持委員会の U Ye Wana (42) 会長にこれまでどのような活動をおこなってきたか尋ねたところ、牛車の鉄の車輪が橋面を痛めるので渡らせないようにしているそうだ。³牛車が橋を渡るのは雨季の7-9月の間だけで、それ以外は牛車道を利用させている。長期維持のため、今後、修繕費の必要性を考え、橋の両側の村人たちから寄付を募るつもりだと話していた。

橋建設委員会では会長を務めた U Ye Myint は、橋維持委員会では役職につかないが、変わらず村の発展に貢献したいと述

³ 沈下橋の橋面はコンクリートのため、牛車の車輪に巻かれた鉄で損傷することはない。誤解している住民が多い。

べた。「この地域は雨季になるとずっと苦労をしていたんだ。道路と沈下橋が完成するまでの1年半、交通の便を良くさせたい一心だった。道がコンクリートまたは舗装道路になれば、もっと便利になるから政府に申請したよ。予算の都合上、どうなるか

分からないけどね。日本大使館とやり取りをし、GGP橋が完成したことで自信がついたよ。自分たちの力で出来ることをやっていくよ」と語る67歳になるU Ye Myintさんの周りで村人が頷いていた。

フォトレポート



アウンラン町側から見た GGP 橋



朝、出発したバスが大勢の乗客を乗せ
アウンランから戻ってきた



橋面



銘版



絶え間なくバイクが往来する



牛車道



スピードを落としてすれ違っていた



橋の側面



日本が支援した橋という看板
橋の両側に設置



毎日、沈下橋を利用する中学教師
Daw That Mon Aung (左) と Daw Phy
Phy Thin (右)



バイク通学をする生徒



橋建設と橋維持委員会メンバー
橋建設委員会 U Ye Myint 会長 (右端)

メッタ橋

マグウェ地域 アウンラン地区（橋長 178 m、幅員 4.3 m）

| 27

現地レポート

メッタ橋はアウンランの町から南東に車で約 30 分の場所に位置する。2018 年度の事業で建てられたメッタ橋はアウンラン町側のオウシッコン村とサミヤ村の境に架かっており、22 村、約 36000 人に裨益する。この辺ではゴマ、豆などを栽培している。

沈下橋建設前の雨季の時、どのように河川を渡っていたかという、それほど水量が多くない時は歩き、または筏に 4-5 人が乗り、その筏をロープで引っぱっていたそうだ。この辺の人は、河川を渡る時は替えの服を持参するのが常だった。

水位が増し、筏も出せないような時でも、どうしても向こう岸に行かねばならない状況だと、頭が出るようだったら無理して渡る人もいたという。買物であれば諦めて別の日に行けば良い。けれど、お葬式や仕事関係の急用だと無理して渡るのであった。そのような危ないことをするのは泳げる人たちであるが、流されて亡くなる人もいたそうだ。ここの河川は大人も流されてしまうほど流速が早いという。また、大雨

が降ると河川が洪水し、2-3 日連続して渡れないこともあった。

雨季ではない時も一年中、水が流れる河川なので、この辺では漁をする人たちもいる。そこで雨季が明ける 10 月、沈下橋が完成するまでの 4 年間は 150 人の村人が橋を作っていた。一方通行ではあるがバイクが渡れる竹製の橋を 6 時間で造りあげるのだそうだ。橋桁は村の木材を伐採し、橋面の竹はアウンランの町で買っていた。毎年、橋を造るのに約 25 万チャット¹費用がかかっていた。バイクがある 200 世帯から 500-1000 チャット徴収し、さらに寄付を募って工面していたという。雨季が始まると竹製の橋は水流にのまれて壊れてしまうが 10-5 月までの間は自助努力による橋があるという訳だ。しかし、その竹製の橋を建てる前は、乾季や暑季でもみな足を汚して河川を渡っていたのだった。

沈下橋が建設されたことで、住民の生活に良き変化をもたらした。例えば、雨季の 8-9 月に収穫するゴマの価格は新しい方が値段は良い。すぐに売りたいくても水量が多く河川を渡れず、タイミングを逃すこともよくあったそうだ。河川が洪水し、2-3

¹ チャット(k)はミャンマーの通貨単位。1000 チャット ≒ 80 円。

日待たされていたこともあった。今は、電話で情報を得たら、直ちに市場まで届けることができるようになった。アウンランまで以前は1時間半、今は30分しかかからない。

保健面においても、以前と比べると大きく変わったと村人たちはいう。まだ沈下橋のなかった2017年、急患が出てアウンランの病院へ搬送しようと筏に乗せ、河川を渡ったが間に合わず、亡くなってしまったと悲しい過去を淡々と語った。今は雨季でも、ヘビに噛まれた人、ぜんそくの発作が出た人、緊急手術が必要になった妊婦たちをアウンランの病院まで車で搬送し、命を救った。それもこれも沈下橋のおかげだと感謝する。

サミヤ村の人で沈下橋の建設現場で働いた人はいなかった。ちょうどサトウキビの収穫で忙しく、時間を割くことができなかったからだ。橋向こうのオウッシンコン村の住民はサトウキビ栽培をしないので、日雇いで3ヶ月半ほど数人働いていたそうだ。

けれどサミヤ村の人も、毎日のように建築現場の様子を見に行っていた。手抜き工事だと感じたことは一度もなく、しっかりとした造りで安心だと思ったそうだ。サミヤ村の村長で橋建設委員会の会長でもあるU Hla Htun (54)は、携帯電話に今もその時々撮影した写真を残していた。嬉しそうに説明しながら見せてくれた。村人たちがいかに沈下橋の完成を待ち望んでいたか感じられた。

沈下橋を渡る時、子どもたちにどのように教えているか、母親のDaw Khin Mar Win (42)に尋ねると「橋を壊さないよう守るのよと言っている」という返答。子どもたちが橋から落下しないように注意するものと思っていたので意外だった。それほど沈下橋がないと大変なのだ、守っていかなければいけない財産なのだを教えているようだ。そこで、安全面についてさらに質問すると、子どもたちだけで橋をわたることはまずないとのこと。常に大人と一緒になので、これまで落下したことはないし、今後もないと思われるという。12歳くらいから友だちと一緒にバイクで渡ることがあるかもしれないが学校が夏休みとなる夏季に、水遊びに出かける程度とのこと。雨季にはバイクで外出はさせないそうだ。

実は、村人だけでなく、子どもたちの意見も聞いてもらおうと、サミヤ村の中学校に通う児童生徒たちも集まってくれていた。はじめにDaw Aye Mon Kyaw (28)先生に、学校ではどのように安全指導をしているのか質問した。「橋を渡る時は誰か大人と一緒に渡ること、橋にゴミが落ちていたら拾うようにと言っています。日本に造ってもらった大切な橋なのよと教えています」と話してくれた。ちゃんと日本の支援ということが伝わっているか、児童生徒たちに「橋を建てたのはどこ？」と聞いてみた。間髪入れず「ジャパ〜ン！」と大きな声が返ってきた。

6年生のMaung Sai Zaw Zaw (11)に沈下橋のことをどう感じているか聞いてみた。これまで雨季にアウンランの町側に行くのが大変だったので、改善されてとても

嬉しい。橋に手すりはないが怖くない、みんなも怖くないと思うよと意見を言ってくれた。

Daw Aye Mon Kyaw 先生はサミヤ村出身ということで、これまでの暮らしについてさらにお話を聞いた。サミヤ村には高校がないので、アウンランで寮暮らしをして通学していた。週末には村に戻るため、ずぶ濡れになって河川を渡ることもあったそう。雨季でも、たびたび親が食事を寮まで持ってきてくれていたそうで、そのたび申し訳なく、そしてありがたいと感じていたという。大学生になってからは、バスのチケットを購入していたので授業を受けるため、河川を無理して渡ったこともあるそう。今は橋のおかげでとても便利になったものだと感慨深げに語ってくれた。そうして、雨にも負けず学位を取得し、地元の中学校で教師となったのだった。沈下橋がない時代に、河川を渡ってこなければならなかった先生たちは泣いて「もうやだ、帰りたい」と言っていたそう。「沈下橋ができた後、赴任になった先生はとても幸運ですよ。今はそんな泣き言を言う先生はいないですよ」と教えてくれた。

橋建設委員会の U Hla Htun 会長に、沈下橋完成後の雨季の様子を尋ねた。橋面よりも上に水位が増しても、約1時間後には水が引き、橋面よりも下になったそう。橋面よりも上に水位が増すと橋を封じ通行禁止にしており、必ず橋面よりも水が下にな

ってから渡るようにしているのだそう。赤白の地覆が見えず、膝くらいまでの水位になったことが3回ある。その時は5時間くらいで橋面よりも下になったという。

大雨が降った後、橋に流木やゴミが堆積すると清掃活動に参加を促すため、家々に聞こえるよう放送し、夕方4時くらいから男性たちが橋に集まるのだそう。流木やゴミはまた河川に流すとのこと。しかし、除去活動は大変で、流木が橋桁にへばりついて人力ではどうすることも出来ない時もあったそう。その時はショベルカーを1時間レンタルし、6万チャット支払って片付けたという。橋にかかる出費があるのに、橋維持委員会は組織されていなかった。今は、橋面を痛めないよう、牛車の往来は雨季のみとし、暑季は牛車道を利用させている²ことしか対策をしていないそう。今後も、いろいろとお金があることは分かっていると会長は答えた。

最後に何か、言いたいことありませんかと質問すると、黒ゴマを見せて橋建設委員会メンバーの U Myint Swe (58) が話した。この地域の黒ゴマはオーガニック農家と認められており、高値で仲買人を買ってもらえている。しかし、仲買人は、良いゴマと悪いゴマを分けることなく一緒に混ぜて売ってしまうので、村のゴマの価値が落ちると嘆いた。サミヤ村の独自ブランドとして売りたいがそこまでの力がない。買ってくれそうな日本の企業を知らないかと相談してきたのだった。このような意識

² 沈下橋の橋面はコンクリートのため、牛車の車輪に巻かれた鉄で損傷することはない。誤解している住民が多い。

が芽生えたのも、沈下橋ができてアクセスが良くなり、経済活動が活発になったからだと思われる。思わぬ副産物をもたらしていた。

さらに U Myint Swe は自慢の黒ゴマを作っているが生活が苦しいので、娘と息子が海外で出稼ぎしていると付け加えた。村

の若者 100 人ほどがマレーシアやタイで働いているという。マレーシアで働いて 7 年になる娘さんとは毎日インターネットを介し、顔を見ながら話しをするのだそう。沈下橋が完成したビデオを Facebook に載せたところ、それを見た娘が村の発展を喜んで泣いていたと教えてくれた。

フォトレポート



アウンラン町側オウシッコン村から見た
メッタ橋と通行止めゲート



バイクの往来が多い



サミヤ村から見たメッタ橋と
通行止めゲート



車両もよく沈下橋を渡る



橋の全景



バイクが来ると端に寄る歩行者



牛車の車輪で橋面を痛めるので渡ることを禁止しているが牛は問題ない



メッタ橋とサミヤ村間の道路を村人が自助努力で整備していた



年中、河川には水が流れ、魚がおこなわれている



サミヤ村の中学生も意見を述べてくれた
沈下橋を建設したのはどこか尋ねると「ジャパーン！」と大きな声で答えた



サミヤ村の村長で橋建設委員会の会長 U Hla Htun (左) とオウッシコン村在住の橋建設委員会メンバー U Ko Oo (右) 銘版の前にて



サミヤ村の建設委員会メンバーと村人たち

建設省地方道路開発局（DRRD）

マグウェ地域 タイエツ地区

終業間近、建設省地方道路開発局（DRRD）の事務所を訪問する。短い時間ではあったが話を聞かせてもらった。同局では橋よりも道路の建設に携わることが多いそうだ。

エンジニアの Daw Lai Lai Win と Daw May Zin That の2人は沈下橋の建築作業を見ておらず、完成後の橋を見に行っていたことがあるということだった。コンテナなどを載せた大型車両は通れないが、堅固な作りだと感じたそうだ。また、エンジニアから見てもシンプルな構造の橋で、予算少なく村の発展に貢献できるので、もっと建設すべきだと思うという声が聞かれた。



DRRD の職員と庁舎の前で

高等技術専門学校 (GTI)

マグウェ地域 タイエツ地区

| 34

マグウェ地域タイエツ県タイエツ市にある高等技術専門学校 (GTI) は 2010 年 10 月に開校された。約 40 エーカーの校内で、教師 57 名が 630 名の学生に教鞭をとっている。

同校は 3 年制で、土木工学、電子工学、電気工学、機械工学を学ぶことができる。人気の学科は土木工学。就職に有利と考える親がすすめるのだそうだ。

2019 年 3 月、同校の教室を借り、JIP 主催で技術移転のためのワークショップを 2 日間開催した経緯がある。学長は教室を提供するだけでなく、ぜひとも学生たちにも学びの機会を与えて欲しいと提案し、土木工学を学ぶ 3 年生 40 名も参加することになった。

Dr. Kyaw San Win 学長は「学生にはまだまだ知識が必要なんです。このような生きた学びの場をこちらはもっと受け入れたいのです。沈下橋は地域にとって意義ある事業ですから関心を持っています。ワークショップや講演など、今後もおこなって欲しいです」と大歓迎であった。ワークショップは沈下橋の技術移転を目的とするもので、政府関係機関職員たちを対象におこなっていた。学生たちにとって、図らずも現役で働くエンジニアと知り合う機会にもなり、就職に繋がる可能性が出来たと学長は喜んでいました。

その後、ワークショップに参加した学生と教師は沈下橋の建築現場へ見学に行ったそうだ。これまでは 3G や設計図面でしか学んでこなかったが実際の仕事ぶりを目の当たりにし、どのような作業をするのかわることができ、とても勉強になったと学生たちは言っていたそうだ。

同校の授業はほとんどが講義。予算が少ないため、CAD に触れるのもごく短期間で、機械工学の授業で基礎を教える程度らしい。同校では 3 年の過程を終える前の 3 ヶ月間、企業のインターンとして研修を受け、レポートを提出して卒業する。3 年間で、その程度しか実技がない。

また、DRRD のエンジニアから、もし卒業後、関心があれば DRRD に連絡するようにと言葉をかけてもらい、連絡先を教わったそうだ。しかし、GRRD に就職した学生はいないらしい。

同校だけでなく、ミャンマーの教育機関に就職課などなく、学生たちの就職先までフォローできていないのが現状だ。近年、同校では企業合同説明会を始めたそうで、このような機会も増やしていきたいと考えているそうだ。

ちなみに同校卒業者の 10% が技術大学 (TU) に進学する。進学しない卒業生たちは地元に戻ってしまうため、連絡が途絶えてしまうそうだ。もう少し深く聞いてみると、連絡がつかなくなる理由が分かった。都会の高等技術専門学校 (GTI) だと

入学希望者が多いため、入学試験の点数が足りないと感じる学生は、町から離れた場所にある同校なら人気がないだろうと考え、地元から離れているが入学申請をするのだそう。そういった理由で入学希望者が殺到し、新入生 240 名の枠に 600 人以上が申請し、300 人以上が入学できないのだった。不便な立地条件ゆえに同校は人気校となり、全国各地から学生が集まっている。卒業後、地元に戻る学生が多く、その後連絡が取れなくなっているという訳なのだった。

では連絡がとれる卒業生はどうかと聞くと、先生が就職先は決まったか聞いても、給料の安いところだと恥ずかしがって、まだみつかってないと答えてしまうらしい。政府関係でも民間でも、建設関連の仕事を得るにはツテのある人が優先されるそう

| 35

だ。学長は沈下橋の存在を同校でのワークショップ開催まで知らなかったそう。ミャンマーの現状に則した素晴らしい技術の橋だと思ふと別れ際に述べていた。



GTI で土木工学を教える教員と学長（右）